

最後の授業

アルフォーンズ・ドーデ

その朝は、学校へ行くのがたいへんおそくなまし、アメル先生から文法の質問しつもんをされると言われていたのに、わたしはなにも勉強していなかったのもので、しかられるのがこわかったのです。

それで、学校を休んでどこかへ遊びにいこう、と考えました。

空はよく晴れてあたたかでした。

森のなかでは、つぐみが鳴いていまし、リベールの原はらっぱからは、木こびき工場のうしろでプロシャの兵隊へいたいたちが訓練しているのがきこえます。森へいこうか、原はらっぱへいこうか、どれも、文法の規則きそくよりはわたしの心をひきつけました。けれど、やっとこのゆうわくにうち勝って、いそいで学校へむかってかけだしました。役場のそばをとおると、金網かなあみを張った小さな掲示板けいじばんの前に、おおぜいの人ひとが立ちどまっていました。二年ほどまえから敗戦はいせんとか、挑発ちようはつとか、司令部しれいぶの命令めいれいとかいうようないやなしらせは、みんな、ここにけ掲示けいじされることになっていました。わたしは歩きながら考えました。

〈こんどは、なんのしらせかしら？〉

そして、小走りとおりすぎようとする、そこで、弟子といっしょに掲示を読んでいたかじ屋のワシュテルさんが、大声でわたしに言いました。

「おい、ぼうや、そんなにいそがなくたっていいさ、どうせ学校にはおくれっこないんだから！」

かじ屋のおじさん、わたしをからかっているんだな、と思ったので、わたしは息をはずませて、学校の間をくぐりました。

いつもなら、授業のはじまりはたいへんなさわぎでした。つくえをばたばたあけたりしめたりする音や、日課を暗記しようと、耳を手でふさいで大声でくりかえしている声やら、「さ、すこし静かに！」と、じょうぎでつくえをたたきながら叫ぶ先生の声が往来まできこえていたものでした。

わたしは、みんながこうしてさわいでいれば、だれにも気づかれないで、そっと自分の席につくことができるだろうと思いました。ところがその日は、なにもかもひっそりとして、まるで、日曜の朝のようでした。あいている窓ごしになかを見ると、クラスの者はみんな自分の席についていますし、アメル先生が、あのおそろしいじょうぎをかかえて、いったりきたりしていらっしゃいます。戸をあけて、この静まりかえったまっただなかに入らなければならないことを思う、なんだかはずかしいような、こわいような気がします。

ところが、大ちがいでした。アメル先生は、おこるどころか、わたしを見ると、やさしい口調で、こう言われました。「フランツか。早く席につきなさい。もうこないのかと思って、はじめるところだった。」